氏名（本籍）	古井　智（神奈川県）
学位の種類	学術博士
学位記番号	博美第 17 号
学位授与年月日	平成3年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉「ICONOSCOPES」他 〈論文〉「不可能なテクスト」

論文等審査委員

（主　査）	東京芸術大学	教　授	（美術学部）	麻生秀穂
（副　査）	〃	〃	（　〃　）	辻　茂
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	大沼映夫
（　〃　）	〃	助教授	（　〃　）	榎倉康二

（論文内容の要旨）

本論文は、『第Ⅰ部・作品編』と『第Ⅱ部・論攷編』から成る。

第Ⅰ部では、作者が1983年から1990年にかけて制作した博士論文の対象作品28点の作品図版とその解説文が掲載された作品集として、東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程における創作研究とその成果の大要が示されている。

『第Ⅰ部・作品編』

1983年	言語中枢・サイボウ＋－0	
1987年	退化の道標	
1989～90年	Object-program	#1～7
	Theorem	#1, #5
	Terminal-board	#1～8
	ICONOSCOPE opp.	1～13

第Ⅰ部を構成する前半（1983～1987年）の作品群は、物質の記号化というテーマを表現の中心に置いている。

作者は、物質によって限定された芸術表現手段に対し、アンチテーゼとして否物質化、また記号化という手段で世界と対している。作者が使用する素材は、自然の木や、時間を経て朽ちた古い材木、また日常生活の中にあるテーブル、タイプライター、椅子、ドアーなどを銀色の塗料を塗布することによって均質化し、記号化することによって再構成し、非常にインパクトのある空間を表出している。それは、私達の消費文化、社会に囲まれた日常生活においての認識行為に対しての鋭い批判である。

後半（1987～1990年）の作品群は、作者が昨年博士後期課程の修了制作として本学芸術資料館で展示し、また、個展で発表した作品が中心となっており、前半の物質の記号化というテーマをより発展させて、現代の情報化社会そのものに焦点を合わせている。

表現手段としては、映画のスクリーンを思わせるような平面や写真などを使用し、また物質の残骸をイメージさせるような素材（セメント）を使用している。それらは、日本を含む世界の現代情報化社会において、情報そのものが持つ存在のリアリティーを表現のベースにし、私達の未来社会において芸術表現のこれ迄にない広がりの可能性と同時に、世紀末的な不安感とを両義的に表現している。

第Ⅱ部・論攷編では、作者が表現活動の基本理念を確立することを目的とし、「芸術」とは何か？という永遠の問題を歴史的視野から問い直すことを含め、国際的な視点に立った今日の芸術の在り方の問題点、矛盾点を指

摘しつつ、それを如何に克服して行くかという問題提起としてのテクストの作成を試みたものである。

『第II部・論攷編』

論文「不可能なテクスト」

序

I　過去――歴史主義の破産

II　現在――消費文化と「芸術の死」

III　未来――情報化社会のラディカリズム

結語

Iでは、マルセル・デュシャンの非芸術としての行為、また、ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」と名付けた芸術至上主義からの脱却とを中心に置いた論であり、アヴァンギャルド芸術活動の終焉が同時に脱近代化へのベースとして語られている。

IIでは、現在の消費社会の構造から生まれたポップ・アート、特にラウシェンバーグを軸にしたアメリカ美術に対する批判的な論である。

IIIでは、筆者自身が作品の上で試みている部分であり、情報化社会において芸術は如何に在るべきかが語られ、情報自体の存在を認識した上で、私達人間がどのように関わるべきかを論じている。